

氏名：新谷 優

所属：法政大学グローバル教養学部

業績説明

25. Niiya, Y., Jiang, T., Yakin S. (2021). Compassionate goals predict greater and clearer dissent expression to ingroups through collectively oriented motives in Japan and the U.S. *Journal of Research in Personality*, 90. <https://doi.org/10.1016/j.jrp.2020.104057>

自分が所属する重要な集団（内集団）に対して異論を表明することは、集団の役に立つことがあるにも関わらず、他者に嫌われるリスクが伴うため、集団の和を重視する日本社会では特に難しい。本論文は、思いやり目標（他者のためになることをしようとする）を重視する人ほど、日本人でもアメリカ人でも、集団に利益をもたらしたいという動機が強く、内集団に対して異論を表明し、より明確に、自分の意見として異論述べることを明らかにした。一方、他者に良い印象を与えようとする目標は異論の表明頻度や方法とは一貫した関係性がなかった。思いやり目標をもつことは、他者に好かれようとすることや、集団の和を保つこととは異なることを示した。

22. Niiya, Y. (2018). My time, your time, or our time? Time perception and its associations with interpersonal goals and life outcomes. *Journal of Happiness Studies*, 20(5), 1439-1455. <https://doi.org/10.1007/s10902-018-0007-y>

誰にとっても一日は24時間であるが、我々は時間を人から取ったり、人に取られたりするゼロサム的な資源として捉えることが多い。一方で、時間は非ゼロサム的な資源、つまり誰の所有物でもなく、「そこにあるもの」として捉えることもできる。本論文は、時間を非ゼロサム資源だとみなす人ほど、基本的な心理的欲求（自律性・能力感・関係性）が満たされ、幸福感も高く、知覚されたストレスが低いことを明らかにした。一方、時間をゼロサム資源だとみなす人、中でも特に他者の時間を取っていると感じる人ほど、心理的欲求の充足度と幸福感が低く、知覚されたストレスが高かった。時間に対する考え方がウェルビーイングと深い関係があることを示した。

18. Shimizu, M., Niiya, Y., & Shigemasu, E. (2016). Achievement goals and improvement following failure: Moderating roles of self-compassion and contingency of self-worth. *Self and Identity*, 15(1), 107-115. <https://doi.org/10.1080/15298868.2015.1084371>

（指導した学生の卒業論文を発表したもの）

習得目標（自分の能力を伸ばす目標）をもつ生徒は、遂行目標（他者よりも良い結果を出す

目標)をもつ生徒よりも、学習意欲が高く、困難な課題に対して粘り強さを見せると言われているが、実際に成績が向上するかは明らかでなかった。本論文は、実験参加者に習得・遂行目標のいずれかを教示後、認知課題で失敗を経験させ、課題のコツを伝授した後、同様の課題に再び取り組ませた。その結果、習得目標群は、遂行目標群よりも2回目の課題の成績が良くなっていた。また、遂行目標群でも、セルフ・コンパッションの高い人や、他者との競争に負けることが自尊心の脅威とならない人は、習得目標群と同じ好成績となることを示した。

3. Niiya, Y., Ellsworth, P. C., Yamaguchi, S. (2006). *Amae* in Japan and the U.S.: An exploration of a "culturally unique" emotion. *Emotion*, 6, 279-295.
<https://doi.org/10.1037/1528-3542.6.2.279>

「甘え」という言葉は日本語にしか存在せず、甘えは日本文化固有であると言われてきたが、本論文はアメリカ人も日本人と同様に、甘えという感情を理解しうることを示した。日米の参加者に「友人が自分に甘えた」、「友人が自分以外の友人に甘えた」、「誰にも甘えなかった」という内容のシナリオを提示し、その時の感情の評定や認知的評価をさせた。アメリカ人も日本人と同様に、友人が自分に甘えるシナリオでは、その他のシナリオに比べ、ポジティブ感情・友人に対する親しみ・コントロール感が高かった。また、日本人参加者の大多数は、アメリカ人参加者の頼み事に関する記述を「甘え」と評定した。感情の概念や言葉がなくても、感情を経験しうることを示した。

2. Niiya, Y., Crocker, J., & Bartmess, E. N. (2004). From vulnerability to resilience: Learning orientations buffer contingent self-esteem from failure. *Psychological Science*, 15, 801-805.
<https://doi.org/10.1111/j.0956-7976.2004.00759.x>

学業成績に自尊心を付随させている学生は、重要な試験で悪い成績をとると自尊心が低下する。しかし本論文では、増大的知能観（知能は努力や環境次第で変化するという信念）は失敗後の自尊心の低下を緩和することを示した。参加者の学業成績への自尊心付随度を測定した後、学業試験を受けさせ、増大的または固定的知能観（知能は生まれ持ったもので不変という信念）を操作した上で、成功または失敗のフィードバックを行った。自尊心が学業成績に付随している参加者は、固定的知能観を喚起されると失敗後に自尊心が有意に低くなるのに対し、増大的知能観を喚起されると失敗後も自尊心を維持した。学習（成長）志向は、自尊心を失敗の脅威から守ることを示した。